

ほろく

る

しなせき

2021 #01 Tanaka Shusuke [Beginning of love] / #02 Moriya Yuki [walk with serpent] Gallery PARC



ギャラリー・パルクが2020年より主催するプロジェクト『すべ としるべ』は、変容していくこれからの社会状況の中で、「展覧会」という機会をよりタフに起動させていくための方法の開発・獲得を目的に取り組むプロジェクトで、昨年に続き2回目の開催となるものです。

「展覧会」とは、アーティストが表現(すべ)を社会に向けてひらく標(しるべ)であり、また鑑賞者は作品と空間・時間をともにするなかで、それぞれにとっての方法(すべ)を発見する「体験」を得る機会・場であるといえます。

しかし、表現と社会、表現と鑑賞者が直接的に触れ、接することによる体験を必然とする展覧会という形式は、それゆえに今日の社会状況の影響を受けやすく、また鑑賞者からのアクセシビリティも低下せざるを得ない状況にあるといえます。

ここで、展覧会を「体験の場」と強く限定してその形式に拘泥することは、結果的に表現へのアクセスの機会そのものを減少させ、またVRなどを活用したオンライン展覧会などの鑑賞機会は、アクセスの容易さに比してはまだ鑑賞体験の代替機能としては不十分なものであると考えられます。

パルクでは、現在のこの「展覧会=体験」と「アクセシビリティ」という現実的な矛盾の狭間で立ち尽くすのではなく、ここから先に進むための試行錯誤に取り組めます。いま・ここで既存の方法を検証・改良するとともに、これまでとは異なる思考・方法を実践することで、これからの変容する社会の中で、展覧会が起動し続けるための方法(すべ)を身に付けたいと考えます。そこで『すべ としるべ』では、展覧会における記録(映像・写真・言葉)のあり方に焦点をあて、ここに新たな構造を導入することで、記録それ自体による新たな鑑賞・体験の創出を試みます。

本プロジェクトは京都府南丹市八木町に残る築400年を超える旧酒造を会場に、田中秀介(美術家)と守屋友樹(写真家)による、それぞれ6日間の公開展示と、この展示に取材した麦生田兵吾(写真家・映像作家)と今村達紀(振付家・ダンサー)による映像、野口卓海(美術批評・詩人)の編集・制作による記録物とにより構成されます。こうして従来の「展覧会」と「その記録」という不可逆的な補完関係に切れ目を入れることで、ひとつの展覧会を起点に、映像・記録のそれぞれが自立した眼差しから作品や表現を発見・解釈し、それぞれの媒体の特性をもって「つくる・のこす」ことに取り組めます。

田中秀介は自身が取り組む絵画制作にまつわる思考の延長として、支持体となるキャンバスから矩形を排した、いわゆるシェイブドキャンバスによる作品を会場に持ち込みます。酒造りの機械や什器とともに、かつての作業の痕跡や気配が残る旧酒造の巨大な会場に配されたシェイブドキャンバスによる絵画は、いずれも鑑賞者の視点によって前景(画面)と後景(背景)の関係に変化が起こります。いわば田中の試みは、作品・空間・鑑賞者の関係によって常に変化し、展覧会という場で起こることが作品であるといえます。

守屋友樹は見知らぬ土地をフィールドワークする中で撮影した写真や映像、音を中心に、オブジェなどを用いたインスタレーションを会場に持ち込みます。さまざまな土地に残る民話や寓話などから、とりわけ「水」にまつわる「語り」を観察し、そこから取り出した要素を作品として展開する守屋の試みもまた、作品と空間が鑑賞者を媒介に関わるなかで成立するものといえます。酒づくりの場として、またすぐ裏に大堰川が流れる酒蔵の空間において、鑑賞者はそこに何をを見つけ、何を見つめ、何を語るのでしょうか。

これまで多くの展覧会における記録(写真・映像・情報)は、まず事実を残すことを目的に、実際の鑑賞体験を補完する機能を担っていたといえます。しかし、実際の鑑賞が困難となった現在において、展覧会の「記録」が果たす役割や機能にも変化が必要ではないかと考えます。この2つの展示はいずれも「空間と鑑賞者」を必須として、それぞれに働きかけることでその場に起こる体験を作品の重要な要素として企図されています。では、いま・ここに起こる「体験」を「読み出し可能」な記録とするには、どのような方法があり得るのでしょうか。

プロジェクト『すべ としるべ』では、展覧会を異なる視点、異なるメディアによる自立した記録を「つくる・のこす」ことで、それらが読み出される時に「そこ」に新たな体験を「おこす」ことを目指して取り組めます。展覧会という体験が、記録によってより広く、より遠くに作品や表現を「ひらく」ことの可能性に目を向け、表現がこれからの社会に対応しながら、より強く起動するための(すべ)を編み出していきます。

すべ と しるべ

本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。本リリース掲載画像をご希望の場合には、画像および掲載媒体情報を明記の上【info@galleryparc.com】迄ご連絡ください。尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。

すべ と しるべ 2021 #01

馴れ初め丁場 Beginning of love

田中 秀介 Tanaka Shusuke

2021年 10月9日[土]・10日[日]・11日[月] / 16日[土]・17日[日]・18日[月] 12時から17時まで・入場無料

すべ と しるべ 2021 #02

蛇が歩く音 walk with serpent

守屋 友樹 Moriya Yuki

2021年 10月30日[土]・31日[日]・11月1日[月] / 6日[土]・7日[日]・8日[月] 12時から17時まで・入場無料

オーヤマ・アートサイト O-eyama Art Site

629-0141 京都府南丹市八木町八木鹿草 71 「八木酒造」内

JR「京都駅」より嵯峨野線(28分)で「八木駅」下車。「八木」交差点を越えて直進5分。突き当たり丁字路を右折、「八木酒造」入口より会場へ。
京都縦貫道「八木東IC」より国道9号線を西へ、「八木」交差点を北に1分。駐車場はございませんので、なるべく公共交通機関でご来場ください。

主催・企画 | ギャラリー・パルク(株式会社グランマール) 協力 | オーヤマ・アートサイト
文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業

特設 HP・SNS [f subeshirube](#) [i sube_shirube](#)

主催・企画 Gallery P A R C ギャラリー・パルク(株式会社グランマール)

問い合わせ ギャラリー・パルク 〒604-8115 京都市中京区雁金町373 みよいビル202

TEL 075-231-0706 FAX 075-231-0703 MAIL info@galleryparc.com HP www.galleryparc.com

すべとしるべ 2021 #01

馴れ初め丁場 Beginning of love

田中 秀介 Tanaka Shusuke

10月9日[土]・10日[日]・11日[月] / 16日[土]・17日[日]・18日[月]

12時から17時まで・入場無料

田中 秀介

<https://shusuketanaka.jimdoofree.com><https://www.galleryparc.com/pages/artist/tanakashusuke.html>

「馴れ初め丁場」

今年の寒さが残る頃、すべとしるべのお話を頂き下見のため初めて旧八木酒造にお邪魔をした。私は今回に至るまで酒造場という場所に訪れた事が無く、これまでに得た僅かな知識を接合させ、勝手な酒造場に思いを馳せ現場に赴いた。思っていたものとは一致しないものの、その現場に残置された機材や道具、場の説明を受けると、たちまちここは酒造場であったと疑いなく思い込める。思い込みもひとしお、今一度辺りを歩き見渡す。先ほどまで気づかなかった現場の詳細が徐々に克明となってくる。現場で従事していた方々の痕跡、機材や道具の位置、大きさ、形、色、これら一つ一つが目新しく、またそれらの由縁を探ることは容易くない。今しがた受け取った知見だけでは計り知れないこれら酒造場を為す実態が、私の抱いていた酒造場に更新を促す。

私は今回、束の間この場を更新しようと思う。絵をもってこの場の計り知れなさを際立たせ、またそれにより、絵の持つ効力を確認したい。

ここは鑑賞を想定した場ではなく、絵を見る上で十分な環境とは言えない。しかし、辺りに見受けられる機材や道具は十分なほど感じ取れる。絵も同様、適所に配置できれば、絵の持つ物体としての一面がこの場において効果的に機能し得ると考える。

私はこれまで矩形の作品を発表してきたが、それに加え今回、変形の作品も発表する。これまでの矩形作品では結果的に場が描かれていた。今回の変形作品では場を示す要素は無く、対象物のみ描かれている。背景を取り扱うことにより、作品が展示される状況とより密接に関わる事を目的とする。

現場をしつらう事で、他の場を示す絵、絵とこの場の交わった有様、この場に司る酒造場という前提。大きくこの三つを示し、作用し合わせる事でこの場での目的を果たしたい。

略歴

2009 大阪芸術大学 美術学科 油画コース 卒業

2021 「もうひとつの世界」(和歌山県立近代美術館)

「絵画の見かた reprise」(√K Contemporary / 東京)

2020 「なつやすみの美術館10:あまたの先日ひしめいて今日」(和歌山県立近代美術館)

個展「かなたの先日ふみこんで今日」(和歌山県立近代美術館企画 / ぎやらり-なかが)

「停滞フィールド」(トーキョーアーツアンドスペース本郷 / 東京)

2019 個展「随所、ただいまのち合わせ」(2kw gallery / 滋賀)

「忘れようとしても思い出せない」(ボードレス・アートミュージアムNO-MA / 滋賀)

2018 個展「清須市はるひ絵画トリエンナーレアーティストシリーズVol.87田中秀介展-カウンターライフ」(清須市はるひ美術館 / 愛知)

「アーカイブをアーカイブする」(みずのき美術館 / 京都)

2017 個展「ふて寝に晴天、平常の炸裂」(Gallery PARC / 京都)

「アンキャッチャブル・ストーリー」(瑞雲庵 / 京都)

2016 個展「ALLNIGHT HAPS 人と絵の間 -こないだのここからあそこ-」(HAPS / 京都)

[受賞]

2018.4 はるひ絵画トリエンナーレ 準大賞

2016.6 トーキョーワンダーウォール 賞

2009.11 第24回 ホルベイン・スカラシップ 奨学生 認定

2009.10「Art Camp 2009」サントリー賞

[パブリックコレクション]

和歌山県立近代美術館

清須市はるひ美術館

《古今台頭摩擦》 2019 キャンバスに油彩 259×194cm
和歌山県立近代美術館蔵

《突貫昼勤景》 2021 キャンバスに油彩 250×147cm



《異訳べらり》 2021 キャンバスに油彩 33.5×46.5cm

すべとしるべ 2021 #02

蛇が歩く音 walk with serpent

守屋 友樹 Moriya Yuki

10月30日[土]・31日[日]・11月1日[月] / 6日[土]・7日[日]・8日[月]

12時から17時まで・入場無料

守屋 友樹

<https://yk-mry.com>

<https://www.galleryparc.com/pages/artist/moriyayuki.html>

「蛇が歩く音」

さまざまな土地でフィールドワークを行っていると、そこで出会った人々から話を聞くことがある。

その土地に関する昔話や言伝え、全く関係の無い世間話と雑多なもの。なかでも雨や川、湖などの水と深く関わる物語が多くあった。土砂崩れや洪水がよく起こる地域では災害として直接語られるのではなく、人に変身した蛇や龍として現れている。自然を擬人化するのは、言葉のうちに精神と肉体を与える作業ではないだろうか。同時に、土地の歴史や性質を語り継ぐ手立てとしてでもあり、個人の感受を残すことでもある。僕は、蛇の擬人化や象徴から目に映る自然を見返すことを行なう。

略歴

1987 北海道生まれ

2010 日本大学 芸術学部 写真学科 卒業

2012 旧京都造形芸術大学 大学院 修士課程 修了

2020 「影を刺す光-三嶽伊紗+守屋友樹」(京都芸術センター / 京都)

「SUBJECT / OBJECT」(HOTEL ANTEROOM KYOTO / 京都)

2019 「きりとめどると未然の墓標(あるいはねこ動画の時代)2019-2020」(パープルルーム ギャラリー / 神奈川)

2018 個展「シシが山から下りてくる」(Gallery PARC / 京都)

2017 個展「still untitled & a women S」(KYOTO ART HOSTEL kumagusuku / 京都)

「ゴーストに矛と盾」(ARTZONE / 京都)

「7th Dali International Photography Exhibition Asia photo book showcase」(中国、大理市)

「未来の途中の星座-美術・工芸・デザインの新鋭9人展」(京都工芸繊維大学 / 京都)

2016 「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD_NEW VISION#3」(G/P Gallery / 東京)

「ULTRA AWARD×ANTEROOM」(HOTEL ANTEROOM KYOTO / 京都)

2015 個展「消えた山、現れた石_gone the mountain/turn up the stone」(Gallery PARC / 京都)

「ULTRA AWARD2015 POST INTERNET ART_新しいマテリアリティ、メディアリティ」(京都造形芸術大学ギャラリーオーブ / 京都)

「the catalogue: 川内倫子ワークショップ成果発表展」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA / 京都)

「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD_NEW VISION#1」(G/P Gallery / 東京)

2014 「KUAD graduates under 30 selected」(京都造形芸術大学ギャラリーオーブ / 京都)

2013 「脈 vol.3 | ととと」(Gallery PARC / 京都)

2012 「大学院修了展」(京都造形芸術大学 / 京都)

「脈 vol.2 | ゆきてきゆ」(Gallery PARC / 京都)

「Art In Art_二次元と三次元のはざま」(ARTZONE / 京都)

2011 文化庁メディア芸術祭 京都展 パラレルワールド 京都-私のパラレルワールド」(Gallery PARC / 京都)

「photograph-アーティストの見たもの」(STUDOP Y3 / 神戸)

「shift」(Gallery 門馬 / 北海道)

「脈」(Gallery PARC / 京都)

Project

*パフォーマンスユニット「守屋友樹と和田ながら」公演

2018 個展「SICF19」(石|溶けちゃってテレポート、固まってディレイ)(青山スパイラル / 東京)

2017 個展「亀山トリエンナーレ」(山と海に貼り付けた)(三重)

2016 個展「私は春になったら、写真と劇場の未来のために山に登ることにした」(石|溶けちゃってテレポート、固まってディレイ)(アトリエ劇研 / 京都)

Awards

2016 第14回写真「1WALL」奨励賞 鷹野隆大 選

2019 第21回写真「1WALL」奨励賞 増田玲 選



個展「シシが山から下りてくる」展示風景 2018 Gallery PARC



「影を刺す光-三嶽伊紗+守屋友樹」展示風景 2020 京都芸術センター



《蛇が歩く音》展示予定作品 2018-2021 カラー写真 サイズ可変

Press Release:2021.09.29

本展は京都府南丹市八木町に残る築400年を超える旧酒造を会場に、田中秀介(美術家)、守屋友樹(写真家)の2名のアーティストによるそれぞれ6日間の展示と、麥生田兵吾(写真家・映像作家)と今村達紀(振付家・ダンサー)による映像、野口卓海(美術批評・詩人)の編集・制作による記録物により構成されます。それぞれが自立した眼差しをもとに「つくる・のこす」ことにより、展覧会と記録との不可逆的な補完関係に切れ目を入れ、「そこ」に相互の作用や反応による体験を「おこす」ことに取り組みます。

映像撮影・編集・制作:

麥生田 兵吾 Mugyuda Hyogo

<http://hyogom.com>https://www.galleryparc.com/pages/project/pj_2021/2021_02_subeshirube.html

「Artificial S」という一つの主題に専念し制作活動している。「S」は複数の意味と、そして複数性そのものを包含させている主題は全5章で構成され、全章を通して「生と死」が互いに溶け合うさまを表現する。また2010年より写真活動「pile of photographys」をweb上で発表し続けている。主な展覧会として「Artificial S 5 -心臓よりゆく矢は月のほうへ-」(Gallery PARC・2018)、大阪府20世紀美術コレクション展「ココロウツス」(江之子島文化芸術想像センター・2020)。2020年開催の『すべとるべ』での映像制作を担当。

パフォーマー(映像出演):

今村 達紀 Imamura Tatsunori

<https://imamuratatsunori.net>

ダンサー、振付家、パフォーマー、役者として、akakilike、ANTIBODIES Collective、BRDG、contact Gonzo、KIKIKIKIKIKI、Monochrome Circus、Sung Yong kim、したため、多田淳之介、桑折現、白井剛、小金沢健人、村田宗一郎、飯名尚人、塚原悠也、などの作品に参加。呼吸を止めて踊る「無呼吸」、関節を鳴らす「関節話法」、曾祖父の記憶と踊る「もけもけしたものはみ出てくる」などの作品を制作。毎日どこかで呼吸を止めて踊る「本日の無呼吸」は今年で8年目(https://www.youtube.com/channel/UCTM_8yLxIN-9ZT8K7p6pV7w/videos)。2020年開催の『すべとるべ』では写真・映像内においてパフォーマーとして参加。

記録物編集・制作:

野口 卓海 Noguchi Takumi

美術批評家、詩人。おもな展覧会企画として、「有馬温泉路地裏アートプロジェクト」(2013)、「まよわないために -not to stray-」(the tree konohana・2014)、「松見拓也 写真展 | KASET」(hinemos・2015)、「METRO WHITE」(阪急メンズ大阪・2016)、「人と絵のあいだ」(HAPS・2016)、「みたりのやりとり」(マガザンキョウト・2017)など。現代美術へのアプローチと平行し、デザイン・ストリートカルチャー・音楽といった同時代的な他領域へ積極的に携る活動として、hinemosにも参加。2015年からは写真家・松見拓也とデザイナー・三重野龍とのサイファーのような月刊紙片「bonna nezze kaartz」の発行を開始、同名義で展覧会や作品制作なども行う。

2020年に開催した『すべとるべ 2020』は、むらたちひろ(染織作家)と友枝望(美術家)の2名による展示とともに、今村達紀をパフォーマーに麥生田兵吾の制作による記録映像と、勝冶真美(京都芸術センタープログラムディレクター)、はがみちこ(アート・メディエーター)、平田剛志(美術批評)の3名によるレビューを収録した記録集(20頁)により構成し、記録映像作品はWEBにて公開しています。

『すべとるべ 2020』会場風景

